



Title	日本占領期におけるビルマ文学：小説の役割を中心に
Author(s)	南田, みどり
Citation	大阪大学世界言語研究センター論集. 2010, 3, p. 109-136
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11834
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本占領期におけるビルマ文学 —小説の役割を中心に—

南 田 みどり

MINAMIDA Midori

Abstract :

The Role of Burmese Novels under the Japanese Occupation

Although they say that the period of Japanese Occupation was a dark period for Burmese literature, there were not a few publications such as novels, dramas, essays, and so on. It is true that writers hesitated to take up their pens because of the censors, a shortage of paper, air raids, disasters, and economic crisis, but they did not throw their pens away. The reason why they did not throw their pens away is considered that they realized the role of literature. They knew it was not for the sake of Japanese Army but for the sake of Burmese people. This paper aims to examine the role of Burmese literature for Burmese people under the Japanese Occupation mainly through novels.

Nevertheless Thakin Lwin has referred to it in his “Japan Hkit Bama Pye (Burma under the Japanese Occupation)” in 1968 nearly as follows.

‘Any works were permitted to be written freely as long as they contributed to the propaganda of Japanese Fascism’ and ‘They promoted directly or indirectly decadent literature that would paralyze the ethics of the people’. [Lwin 1968:235]

If it is true, the role of novels in this period would have been both propaganda which instilled Japanese Fascism and the decadent amusement which disturbed people’s ethics. As long as this paper examined, the role of novels was found neither to be the propaganda of Japanese Fascism nor to be the decadent amusement. The role of novels for Burmese people was the first, enlightenment, the second entertainment, the third propaganda for unity of people under the guidance of Burmese Army or Anti-Fascist Organization.

This paper referred to 19 fictions (novels and dramas) and 44 short stories. Though there is some doubt whether the literature in the dark period have been bipolar as Thakin Lwin wrote, in order to make sure of his view, it would be needed to make more collection of novels published in the period of Japanese Occupation.

Keywords : The Japanese Occupation, Burmese literature, Novels, Propaganda

キーワード：日本占領期，ビルマ文学，小説，プロパガンダ

はじめに

日本占領期（1942–45）は、ビルマ文学史上「暗黒時代」だったとされるのが通説である。しかし「暗黒時代」にもビルマ人作家はペンを取り、出版社は単行本や新聞雑誌を出版した。そのジャンルも、小説をはじめ戯曲、詩歌、評論、翻訳など多義にわたる。本稿は、そのうち主として小説を取り上げる。まず、日本占領期の文学に関する言説を確認し、続いて当時の文学界を概観したうえで、この時期のビルマ文学が、ビルマの人々にとっていかなる役割を果たしたかを、小説を中心に考察するものである。

1. 日本占領期とビルマ文学

（1）日本占領期ビルマ文学に関する言説

「その時代は暗黒時代だった。暗黒時代には、芸術としての文学は発展しなかった」[Kyaw Aung 1973 : 25] という叙述に代表されるように、一般に日本占領期はビルマ文学の発展が阻害された「暗黒時代」とされる。また、1930年代の文学潮流を評価する立場からも、「不幸にも第二次世界大戦の勃発はこの潮流を押しとどめ、1942年から45年の日本による占領は、ビルマ文学に暗黒時代をもたらした。ファシストの検閲がやってきた。そして深刻な用紙不足もあった」[Min Latt 1962 : 172] と述べられ、文学の発展を阻害した要因に、検閲と用紙不足があげられる。

ビルマを襲った戦火は、全住民の生命を危険にさらし、経済状況の悪化は生活を脅かした。作家も例外ではない。執筆活動よりむしろ、生命の安全と生活の確保が先決であった。文学の発展を阻害した要因には、検閲と用紙不足に加えてこれら生活破壊もあげられよう。それらをもってこの時期を文学の「暗黒時代」と称するとしても、具体的にどのように文学の発展が阻害されたかを、個々の作品から検証する叙述はない。この時期の文学に関する叙述は、大半が断片的なものにとどまってきた¹。この時期の出版物の正確なリストを見出すことにも困難がある²。

1 たとえばジャーナリズム関係は [Htin Gyi 1992] [Ngwe U Daung 1978] [Ba Than, UPI 1978], 小説関係は [Kyaw Aung etc. 1975] [Houng Wun etc. 1975], 風刺漫画関係は [Phe Thein, Cartoon 1978], 詩歌関係は [Hlaing, Tommy 1978] などがあるが、戯曲に関する [Than Nwe, Pyi 1985], 作家協会機関誌『作家』に掲載された詩の研究 [Hla Htwun, Maung 2004] は比較的まとまりがある。日本占領期のビルマ語新聞報道の抜粋集 [Hla, Ludu, U 1968] にも作家協会の活動が断片的に掲載される。

2 日本占領期の著作に関する叙述や解題はノンフィクション関係が大半である。[Taik Soe 1966] は戦後出版された回想録から3点の解説だが、[Aung Hla Soe 1977] には1942年から1977年に出版された日本占領期関係のノンフィクション53点の解題があり、日本占領期の出版物5点を含む。現時点での小説に関するリストは [Aung Win 1981–83] のみで、1942年から1944年に出版された長編23点に言及するが、1点はこの時代の作品ではない。筆者が確認できたのはこの22点中14点である。日本占領期亡命先のインドで出版されたテインペーの著作に関する研究 [Minamida 1887] [南田 1982] [同 1986] [同 1991a] [同 1994] もあるが、本稿の対象はビルマ国内の出版物とする。

たとえばタキン・ルイン<1914-96>³は、日本占領期について諸方面から総合的に叙述した『日本時代のビルマ』の、メディアの項において、小説9点を含む書籍18点を列挙したうえで [Lwin 1968: 234-240]、検閲に言及して、「日本ファシズムの宣伝普及に資するものなら、自由に執筆することが許可され、印刷出版のための用紙の手配が援助され」、その一方で「国民の倫理道德観を麻痺させる退廃的な文学が、間接的直接的に奨励された」と述べる [Lwin ibid.: 235]。彼の言によれば、この時期の文学には、「日本ファシズムのプロパガンダ」的役割と、「国民の倫理道德観を麻痺させる」役割が課せられていたことになる。

とはいうものの、それら二つの役割に該当する作品名が具体的に挙げられるわけではない。彼は、「当時出版された書籍の完全なリストを入手することは困難」で、列挙した書籍名は記録に頼ったものだとも述べる [Lwin ibid.: 236]。リストの入手が困難であることは、書籍そのものの入手の困難をも意味する [南田 2003a: 68-69]。タキン・ルインの著作から40年余が経過した現在でも、日本占領期の文学の全貌は曖昧なままである。

この時代の文学研究をめぐる幾多の制約や困難は、ビルマにおける近現代文学研究の困難のひとつの証左に過ぎない。本稿では、タキン・ルインのあげた「二つの役割」の検討をも含めて、現時点で収集した日本占領期出版の単行本小説、雑誌掲載短編小説を中心に、必要に応じ戯曲随筆等をも補足しつつ、日本占領期においてビルマ文学が果たした役割を検証していく。

(2) 戦後文学における日本占領期

本稿が対象とするのは日本占領期出版の文学であるが、この時期を扱った戦後文学の役割についても少し言及したい。日本占領期は、1945年3月の抗日統一戦線パサパラの蜂起とビルマ軍⁴の反乱、同年5月の連合軍ラングーン占領で実質的に終焉し、それ以降、堰を切ったようにこの時期を扱った小説や記録が出版された。

日本占領期を背景とした小説も、抗日の栄光、民衆の悲惨、抗日闘争勝利と苦難の国家建設、民族友好、反戦平和などを主題として、現在に至るまで多数出版されてきた。それらについてはすでに言及があるが [南田 1991 b, 同 1994: 107-109, 同 2006: 136-137]、日本占領期の出版小説との関連で、カレン族⁵と日本人という2種の他者表象の役割を例に挙げて補足しておく。

3 本文中の初出の人名の後の<>内に生年没年を表す。なお作品名の後の()内には出版年、作家名、生年没年、女性の場合はその旨表示する。生年没年不明の場合表示はしない。生年のみの表示は存命あるいは没年不明の場合である。

4 本稿で便宜上「ビルマ軍」と称するものは、日本軍特務機関南機関によって国外で訓練を受けた「三十人の志士」を中心に1941年12月タイで結成され、当初は「ビルマ独立軍」、1942年7月改変後は「ビルマ防衛軍」、1943年8月の名目的「独立」後は「ビルマ国民軍」、抗日蜂起後の1945年4月以降は「ビルマ愛国軍」を正式名称とする。

5 ビルマ住民の1割近くを占めるカレン族は植民地時代より親英的で独自に抗日を早期開始している。1942年5月にはアルタ地方ミャウンミャでカレン族多数をビルマ軍が虐殺する事件が生じ、その後の日本占領期間もスパイ容疑などで逮捕殺害が繰り返された。現在もカレン族の反政府軍は最大の反政府軍事組織となっている。

一般に、日本占領期を背景とした戦後小説の主要人物は、ビルマ軍とその周辺の人々、および民間人であるが、カレン族の形象化も『ゲリラ9号』（1946 シュエードン・ビー・アウン 1905-85）に始まり、『夜が明ければ』（1962 ソーウー 1919-91）『山地の戦い』（1963 バモー・ティンアウン 1920-1978）をはじめとして少なからず見出せる。それらは、『山地の戦い』を例外として、大半がビルマ族男性とカレン族女性との愛の葛藤と成就を枠組みとする。事実にはほど遠いカレン・ビルマ抗日共闘の、虚構への再現は、抗日の栄光を補完する役割を果たしてきた。しかもそれは、ビルマ軍の活躍を中心にすえたビルマ「正史」の枠を逸脱しない限りにおいて可能であった。このように、カレンの形象化は戦後文学に顕著に登場したのであったが、それは現在のところ、日本占領期に出版された小説の中には見出せていない。

カレン同様、日本人の形象化も、日本占領期を背景とする戦後小説に不可欠な要素であった。日本占領期を重要な回想として挿入する『ミスター・キタムラ』（1954 ソーウー）や『血（邦訳は血の絆）』（1973 ジャーネージョー・ママレー女性 1917-82）のように、日本人が理想的な主要人物として描かれ、個としての日本人と思想としてのファシズムを分離してヒューマニズムを強調するものもあるが、大半の作品は日本人を周辺人物として、残虐非道で無知で粗野なファシズムの権化として描く。このように、日本人の形象化にも、抗日の栄光を際立たせる役割が与えられてきた。

ただし、少数であるが、物静かで、知的な日本軍人の形象化もある。たとえば「ヨシハダ」（1954 フニンウー 1922）は、友人である日本人将校殺害の命を受けた抗日闘士の苦悩を描き、『プイン』（1963 マ・レーロン 1935-91 女性）も、クリスチャンの日本人将校に抗日闘士の恋人を助けられたうえ、求愛される主人公の逡巡を前半の山場とする。しかしこれらの知的日本人は、抗日闘士によって非業の最期を遂げる運命が与えられる。

このような良心的日本軍人の殺害劇は、近年になると救出劇に取って代わられる傾向が見られる。たとえば「如何に慰めようか」（1982 マウン・ルンチン 1938-92）や「君に替わりて馥郁と」（1995 チッフラ 1923）では、抗日蜂起後、良心的日本軍人がビルマ人に匿われる「美談」が回想として挿入され、元軍人本人あるいはその家族がビルマへ恩返しに訪れる後日譚が主要な枠組みとなる。そこで強調されるのは、仏教信仰に裏打ちされた寛容さと慈愛に満ちた「ビルマ精神文化」である。良心的日本人像の形象化にも、「ビルマ精神文化」の優越性を際立たせる役割が与えられたのである。これら日本人の形象化が、日本占領期の小説においてどのように出現するかについては、6.（1）で言及することとする。

2. 日本占領期の文学界

（1）作家協会結成と文学賞

日本占領期の文学界の動向についても、すでに言及済みであるが〔南田 2003b：24-26, 30-33〕、簡単にふれておく。この時期初のビルマ語新聞は、日本軍がビルマ南端のタボイ（ダウエー）の町を占領した後発行された『日刊ダウエー』（1942年2月18日-4

月頃刊行)とされる [Htin Gyi 1992: 293]。1942年8月、ビルマ行政府が設置されると、ビルマ語が公用語に定められ、9月には行政府に情報宣伝局が開設され、出版は日本軍の宣伝活動の一環と位置づけられた⁶。宣伝政策の基本は、「日本軍政を民衆へ浸透させること、すなわち大東亜共栄圏建設と大東亜戦争遂行の意義を理解させ、民衆をして全く日本の行動に協力するように導引すること」とされ、軍宣伝部が1942年9月に対華僑宣伝用に華字紙『華僑正誼報 (正義友好)』を発行し、行政府情報宣伝局は10月にビルマ語日刊紙『バマーキツ (ビルマ時代)』を発行したという [太田 1967: 198-199]。また民間でも、ビルマ語英語日本語その他の新聞が発行された⁷。

日本軍は、作家協会結成もまた宣伝活動の一環と位置づけた。ビルマ作家協会は、「戦時文化を通じて民心の安定を図ることの重要性を痛感した」軍宣伝班が、「ビルマ作戦の一段落とともに、離散した文芸家を糾合して戦中文化の建設に着手」し、『トゥリヤ』新聞編集長ウー・テインマウン<1898-1966>を「督励援助して」結成せしめたとされる [太田 1967: 192]。

ビルマ作家協会は、すでに1940年初頭一旦設立されたが、自然消滅していた⁸。日本軍宣伝班の意図とは別に、ビルマ作家側はこの機に協会再建に動いた。発起人はテインマウンのほか、チーブワイエー・ウー・ラ<1917-82>、ジャーネージョー・ウー・チツマウン<1912-46>、ザワナ (ウー・テイン) <1911-83>らであった。このうちウー・ラは、軍宣伝班所属のコウ・サウン (ポウ・テインウィン) や高見順との協力で、実務面で協会再建に尽力した⁹。

作家協会は1942年9月13日再建され¹⁰、11月15日の第5回執行委員会は雑誌『作家

6 [太田 1967: 197] では、占領当初の宣伝活動を行った軍宣伝班が8月22日、庶務、企画、新聞、放送、文化の6科を持つランゲン情報部に改組され、さらに11月、軍宣伝部に改変され、軍政監部は宣伝要員を行政府宣伝局と軍宣伝部にそれぞれ配置して宣伝組織の強化を図ったとされる。

7 [Htin Gyi 1992: 294-302] では、民間ビルマ語新聞は日刊紙『トゥリヤ (太陽)』(1942年3月-45年4月)『タインチツ (愛国)』(1942年3月-1947年)『ミャンマー・アリン (ビルマの光)』(1942年3月-1945年4月)『マングレー・トゥリヤ』(1942年12月)のほか、初期には、週刊新聞『デルタ日報』(1942年3月)『戦争ニュース』(1942年6月)、日本語では1942年9月より『同盟通信』が発行されたとし、このほか連合軍発行のビルマ向け新聞数紙にも言及される。[太田 1967: 193] では、読売が1943年1月より日刊邦字新聞『ビルマ新聞』を発行し、2月より英字新聞『Greater Asia』が週3回発行されたほか、ヒンディー語、ウルドゥー語、タミル語新聞も若干発行されたとする。

8 第一次作家協会 (Myanmar Saye Hsaya Asiayoun) については [Shwe Hmya 1972: 435] を、その成立事情については、[南田 2000: 33, 49] も参照されたい。

9 [Hla 1968: Vol. 2: 273-274] は、ウー・ラがコウ・サウンを介して高見を紹介され、投獄経験を持つ高見に「反帝国主義者」として親近感を抱いたこと、高見が戦争で破壊されたビルマ作家の生活に大変同情して、協会再建を助言したこと、[Hla ibid.: 278] は高見とコウ・サウンが事務所探しに奔走したことにふれる。高見もビルマ人作家と知己を得ることを熱望しており、[高見 1965: 365, 405] で日本軍の出資を請う申請書を作成するなど、軍とビルマ作家の間で心を砕いたとされるが、高見のビルマ観については改めて検討の余地がある。

10 [Saye Hsaya 1942 No. 1: 81-83] によれば、ミャンマー国作家協会 (Myanmar Pye Saye Hsayamyathin) 役員は、名誉総裁タキン・コウドーフマイン、ダデーガゼット・ウー・キンマウン、ミャンマー・アリン・ウー・セインであり、議長トゥリヤ・ウー・テインマウン、副議長ダゴン・ナツシン、書記長ザワナ、副書記長ティーリマウン、会計ミヨマ・サヤー・ヘイン、監査ミャンマー・ヨウッシン・ウー・マウンマウン、執行委員ジャーネージョー・ウー・チツマウン、トーカ・タードウン、サヤー・チョー、ミヨマ・マウン、ティンカー、ダゴン・サヤー・

『サーイエーサヤー』の発行を決定した [Saye Hsaya 1942 No.1 : 83]。それは開戦1周年記念の1942年12月8日に創刊され、当時唯一の雑誌として愛読された。1943年2月25日協会は、「ビルマ国民の大東亜戦争参加精神昂揚」を目的に作文コンテストを実施した¹¹。また1943年7月23日、ビルマ軍政監部が日本図書翻訳刊行奨励金贈呈式を行い、『土と兵隊』『花と兵隊』（火野葦平1942 訳ウー・フラ）『武士道』（新渡戸部稲造1942 訳ウー・バタウン1914-68）『日本文化の発展』（国際文化振興会編1943 訳ターガヤ・ガ・ソウ1915-98）の4冊に各200チャットを与えた¹²。

1943年8月の名目的「独立」後、行政府宣伝局はビルマ厚生省宣伝局に移行した。政府発行の定期行物として、既刊の日刊新聞『パマーキッ』に加え、10月随時刊の雑誌『パマーティッ（新ビルマ）』が発行された¹³。1943年9月5日の作家協会年次大会で選出された新執行部¹⁴は、文学賞の設置を決定した。1943年出版書籍のうち小説、戯曲、歴史、科学、政治の5部門についてそれぞれ選考委員会を任命し、候補作品収集や授与規定作成担当者を選出した。賞金提供者も名乗りを上げた。選考の結果、戯曲、科学部門の書籍は政府出版物で賞規定に合致せず、政治部門は水準に達する作品がなく [Shwe Hmya 1972 : 441]、小説と歴史部門のみで合意を見た。小説部門は『刀』（ミンスエー1910-49）、歴史部門は『三十人の志士』（ミヤダウンニョウ1915）が選ばれた。賞の授与は翌年も予定されたが、果たされなかった。

文学賞は、英国植民地時代から散発的に授与されてきたが、対象となるのは、ビルマ古典文学や仏典の現代語訳、あるいは英語社会科学書や英文学のビルマ語訳などであった¹⁵。

ティン、キンミョウチツ（女性）、ダゴン・キンキンレー（女性）、上ビルマ特派委員ウー・ラであった。ヤンナイン（現ボウジョウ・アウンサン）市場2階健康博物館ホールで開催された第1回執行委員会で規約が作成された。協会の主要目的は1. ビルマ国民に有用な外国文学の翻訳でビルマ文学の領域を広げ新国家建設を支援する2. 外国作家と交流の機会獲得に努め、ビルマ作家の水準向上を図る3. 作家が経済的利益を享受する協会独自の文学関係事業を計画することとされ、具体的には図書館建設、文学討論会開催、弁論大会開催、知識技術普及のための印刷物発行配布、協会傘下の「作家書籍協会」で会員の作品を選定印刷販売、書籍有限会社設立、週刊誌月刊誌の発行、外国作家の組織との連絡、外国へ代表を派遣して文学の発展に貢献することなどが挙げられた。ここで言う「外国」とは日本をさすと考えられる。

- 11 1943年10月22日の授賞式では協会員で「ビルマ国」外務大臣タキン・ヌが賞を授与した。[Saye Hsaya 1943 No. 3 : 33, 35.] [Saye Hsaya 1943 No. 8 : 48] [Shwe Hmya 1972 : 436-439] も参照されたい。これらによれば、「独立」後協会のビルマ語呼称は Myanmar Naingngan Saye Hsaya Athin とされた。ほかにビルマ都市防衛お囃子コンテストも実施された。作文の内容は、大東亜戦争の特徴、ビルマ国民の戦争への心構え、戦争参加に向け意気軒昂な団結法などを扱うこととし、申請書20枚にビルマ語で記述することが求められた。応募は無料で、応募原稿の著作権は作家協会所有とされた。1位には200チャット、2位には100チャット、3種の特別賞には50チャットが授与された。受賞者は1位シュエーチュンマウン、2位マウン・ティン、特別賞ウー・マウンマウンキン、ニョウトウン、マウン・パペー、マウン・チョーゾーであった。なお、1チャットを1ルピーあるいは1円と、1ビャーを1銭と記す資料もある。
- 12 [太田1967 : 202] [Lwin 1969 : 237-238] に言及されるが、後者は『武士道』を『武士道なる英雄の血』、『日本文化の発展』を『日本文化史』と記す。
- 13 [太田1967 : 404] で記されるが、雑誌は筆者未見である。
- 14 [Saye Hsaya 1943 Vol.9 : 38] によれば、1942年大会の執行部からウー・セイン、ティーリマウン、トーカー・タードゥン、ミョマ・マウン、ダゴン・キンキンレーが退任し、ウー・アウンミャッル、ウー・サヤー・リン、ウー・パチョウ、ウー・ヨー、タキン・トゥンオウ、ウー・チョーミン、ウー・タンティン、ウー・トー、マハースエー、ウー・ニャーナが新任で、残りは残留であった。
- 15 [Shwe Hmya 1972 : 1-29, 484-517] によれば、それらはジャーディン（人名）賞（1884）、政

1930年代には内容形式とも発展していたビルマ語長編小説に対して、英国側は大半を低俗な三文小説とみなして、高い評価を与えなかった¹⁶。ビルマ語長編小説が文学賞の対象となったのは、日本占領期が最初であった。

日本占領期の文学賞にはほかに、『Greater Asia』賞とパーリ語育成協会賞がある。前者は『Greater Asia』紙が1943年8月のビルマ「独立」を記念して、「大東亜共栄圏におけるビルマの役割」をテーマとするエッセー、詩、短編小説を募集したもので、短編小説「ボウ・アーシャ」(シュエーペイントاون1908-61)が受賞した。1944年同紙は、「日本ビルマ協力実話小説」を募集し、ビルマ人3名、カレン人1名が受賞した¹⁷。

後者は1943年、パーリ語の発展普及を目的に設置された。1943年は『パーリ問題』(ウー・ミンスエー1917)が、1944年は『パーリ勝利の偈』(サヤー・ニャン1897)が受賞した。1945年は、募集にもかかわらず応募作はなかったという[Shwe Hmya 1972: 449-453]。

作家協会はさらに1944年5月、「ビルマ文学者の日」を年中行事と定めた¹⁸。1944年11月15日の第1回「ビルマ文学者の日」にちなんで、11月から12月にかけて演劇上演、文学講演会、弁論大会などが各地で実施された。なお、上演劇の演目のひとつ古典劇『ウィザヤ』劇(ウー・ボンニャ1812-67)には、抗日の意志がこめられたという[Lwin 1969: 242]¹⁹。これらの動きからは、1944年8月にビルマ軍や共産党を中心に結成されていた抗日統一戦線の、文学界への影響もうかがえる。

これら作家協会が着手した文学賞授与や「文学者の日」の行事は、今日に至るまで継承される。日本軍の宣伝活動の一環として「結成」された作家協会は、対日協力を装いながらこの機を活用し、戦後文学の「発展」への礎石を築いたのである。

府主催ウエールズ王子賞(1921-1932ただし受賞者のない年度もある)、ビルマ国研究会賞(1916-1922の間で4回)、ティサーワーディー(新聞社名)賞(1924年1926年)、再建仏教徒青年連盟によるYMBA賞(1939年1940年)である。またビルマ教育普及協会が文学コンテストを1927年から1934年まで毎月開催し、英語作品の翻訳を課題とした。『ガンダローカ(書の世界)』誌主催文学コンテストも1941年4月から毎月開催され、翻訳、エッセー、短編小説、戯曲などの課題を与えたが、10回のうち6回は受賞作がなく、10回目から大戦のため中断された。

16 たとえば[クリスチャン1943: 278-280]は1930年代の小説に言及し、その大半を三文小説、実物小説とみなしている。

17 [Shwe Hmya 1972: 454-457]は同新聞を日本軍宣伝局が発刊したと述べ、応募は日本語英語ビルマ語のいずれの言語も可能で、小説とエッセーは1位100チャット、2位50チャット、3位40チャット、詩は1位50チャット、2位30チャット、3位10チャットの賞金が授与された。1944年の受賞者名は記されるが、作品などは不明である。受賞作「ボウ・アーシャ」の表紙では同賞が『Greater Asia』紙と『ビルマ新聞』の共催とされる。

18 [Malihka 1974 Vol. 2: 24-25]では、当初ビルマ学芸院が「ウー・ボンニャの日」として挙行したい旨主張したが、作家協会で「文学者の日」と決定したとする。[太田1967: 256-257]によれば学芸院は1943年3月行政府がビルマ文化の復興と世界文化の理解を目的として学者文化人を招致して設立し、ビルマ語辞典とビルマ百科全書の編纂事業に着手したが、終戦までに完成を見なかったという。

19 『ウィザヤ劇』はコンバウン時代(1752-1885)に、一部の王子たちの素行不良を戒めるために書かれたが、酔いどれの乱暴なウィザヤ王子の姿に聴衆は日本兵の姿を重ね合わせたため、上演後スタッフ・キャストが憲兵隊の取調べを受けた。[Than Nwe 1885: 228-235]によればこれは作家が出演するいわば文士劇で、一部にプロの女優も起用した。ウィザヤ王子を名演したのは作家トウカであった。

(2) 出版事業

日本占領期の出版事業における困難のひとつは、1. (1) でもふれた用紙不足である。1942年には英領時代からの手持ちの良質紙も使えたが、1943年以降徐々に用紙が不足していった。用紙の色は白色に限らず、赤、緑、青、黄色味を帯び、紙質も厚手、薄手、良質、粗悪紙が混在し、後には、すでに印刷された用紙の、裏が白い裏紙も用いられた。印刷用のみならず、包装紙など業務用も欠乏した。個人の蔵書、図書館の貴重図書などが、業務用に高額で業者に買い取られた²⁰。

用紙不足はビルマ出版界のみならず、日本軍の宣伝活動にも打撃を与えた。1944年秋より『ビルマ新聞』『Greater Asia』とも紙面を縮小し、発行回数を減らした。1944年7月以降日本軍のインパールからの敗退に伴い、連合軍の空爆も増加し、宣伝紙発行に影響を与えたという[太田1967:193]。出版事業にとっての日本占領期は、実質的には1942年から1944年のほぼ3年間であった。

この3年間に書籍を発行した出版社は、24社が確認できている。その大半は、たとえば、カウイメイスエー社、ズエー社、ミャンマーアリン社、イエーイエータウ社、トゥリヤ社などのように戦前から活動していた出版社である。さらに、有名作家自身が出版社の経営に携わったケースも少なくない²¹。なお、日本占領期に設立された官製の出版社には、「独立」ビルマ政府の文学図書出版局がある。

これら出版社が扱った書籍のうち、現時点において確認されるもので、文学作品を除き出版点数がやや多い書籍は日本関係のものであり、日本語会話などの学習書のほか、日本のフィクションやノンフィクションの翻訳がある²²。それに続くものが大戦に関する著作で、戦場ルポルタージュや体験記などがある²³。そのほかビルマの歴史文化関係の著作として、子供の遊戯に関する解説、子供向けビルマ史、ビルマ古来の戦術の記録や刀剣の歴史などがある²⁴。さらに、栄養と健康や起業や女性のたしなみに関する実用書がある²⁵。

20 [Lwin 1969:242] によるが、筆者も2002年9月から11月文部科学省在外研究員としてヤンゴン大学中央図書館で日本占領期の書籍を閲覧中、粗悪紙や裏紙を用いた書籍を確認した。

21 たとえばそれらはウー・ラによるチーフワーイエー社、マハースエーによるキンエーチー社、トゥカによるチャンダー社、ヤンアウンによるタンタン社、ダゴン・キンキンレーによるダゴン・キンキンレー社、ジャーネージョー・ウー・チツマウンによるジャーネージョー社、メーミョ・マウンによるマウンミャンマー社などである。

22 1943年発行のサヤー・チョーによる一連の日本語学習シリーズのほか、『日本語初級練習』（トゥカ発行年不詳）『日本民話』（1943ビルマ政府文学図書教育局編、監修・ウー・オウンパー（別名テットウ）、訳ウー・テイン（別名ザワナ）、ウー・ヘイン、ウー・テインハン（別名ゾーヂー））『日本精神』（1943訳ゼーヤ 著 Inahara）『徴用編集者』（1944訳ターガヤ・ガ・ソウ 著 Tatsuki Fujii）『麦と兵隊』（1944訳マ・アマー 著火野葦平）などの存在を確認している。

23 『シュエーダウンの戦闘』（1942ミヤダウンニョウ）『ビルマの戦場』（1942ジャパンピャン・ヤカインチョー）『戦争勝利』（1943ミヤダウンニョウ）『私の冒険』（1943タキン・トゥンオウ）『金のハンマー』（1943ウー・テインマウン監修ミンダー著）『大東亜戦争と共栄体制』（1944ウー・バシン）を確認している。

24 『遊戯全集』（1943ウー・ミヤツソウ監修 ウー・サンマウン著）『基礎ビルマ史』（1943ウー・パニユン+ウー・テインハン監修）『ビルマ歴史民話』（1943ウー・テインハン、ウー・ウン（別名ミントウン））『レットウエートウンダラ著 戦術戦争史と戦術叙事詩』（1943ウー・バタウン監修）『ビルマの刀剣思想』（1944ミヤダウンニョウ）を確認している。

25 『食す人』（1944マハースエー）『力』（1944イエートウンリン）『栄養と健康』（1944シュエーウ

出版事業もまた日本軍の宣伝活動の一環と位置づけられていたが、これらの出版物の多くは、ビルマ民族精神の昂揚やビルマ人に対する啓蒙を意図していた。ただしそれは、日本軍の文化政策の基本を逸脱したものではなかった。文化政策の基本とは、第一に文化的にイギリス色を払拭し、第二にこれに代わって日本文化を普及し、第三にあわせてビルマ文化の振興を企図することとされた〔太田 ibid : 192〕。ビルマ出版界は、文化政策の第一を基本に据え、第二を前面に立てつつ、第三のビルマ文化振興のために、検閲と用紙不足の中で獲得した機会を、最大限に活用したといえよう。

3. 「プロパガンダ」的役割が期待された小説

(1) 受賞小説その1 「ボウ・アーシャ」

ビルマ作家の組織化や出版活動が日本軍の宣伝活動の一環とみなされたことは、小説にも、「大東亜共栄圏建設と大東亜戦争遂行の意義を理解させ、民衆をして日本の行動に協力するよう導引すること」という日本軍の宣伝政策を具現する「プロパガンダ」的役割が求められていたことを意味する。

そのような役割を明確に果たした作品として筆頭に考えられるのは、文学賞受賞小説であろう。そこで、『Greater Asia』賞受賞作品である短編「ボウ・アーシャ」と作家協会文学賞小説部門受賞作品である長編『刀』から、それらの果たした役割を考えてみる。

『Greater Asia』賞は前述の通り、『Greater Asia』紙が1943年8月のビルマ「独立」を記念して、「大東亜共栄圏におけるビルマの役割」とのテーマで応募を募ったものである。受賞短編「ボウ・アーシャ」は、主人公でビルマ独立軍将校の愛称である²⁶。作者シュエーペイントاونは、主人公を「独立ビルマ」が求める理想的人物として創造した。不正を憎み、正義を愛し、国家と民族に命をささげることが誓う主人公は、1942年初頭に日本軍とともにタボイからビルマに入り、戦闘を重ねるにつれ、武勲の誉れ高い勇士として名を馳せる。

作品は三部構成であり、第一部分が1942年ビルマ中部のモンユワー付近の小村における主人公と村娘の出会い、第二部分が娘宛の主人公による1943年8月1日付けの書簡、第三部分は、1943年雨季明け(10月から11月頃)の上述の村における彼ら二人の結婚式挙式後の語りである。第一部分から1年あまりの後に、村は「繁栄」し、娘は美しく成長している。

シュエーペイントاونは、作品に与えられたテーマ「大東亜共栄圏におけるビルマの役

ダウン)『合同売買』(1943 ナガーニー・ウー・トゥンエー)『養鶏法』(1944 著者不詳)『女性の手引き』(1944 ドー・チャーチー女性)などを確認している。確認は主として実物による。雑誌『作家』などには書籍出版広告もあるが、計画のみで、実際には発行されなかった可能性もある。ほかに戦前の作品の再版もある。書籍の価格は、1942年出版書籍で25銭(25ピャー)から125銭、1943年の出版書籍で75銭から250銭、1944年の出版書籍では5チャットとの表示が見られる。発行部数の明記された書籍は小説のみで、たとえば『知患者』(1943 トッカ+マハースエー)で2000部、『詩人』(再版1944 ダゴン・キンキンレー)で1000部とされる。

26 「ボウ」は将校、指揮官を意味し、「マウン」「コウ」「ウー」「タキン」等同様男性名の前に冠称として用いられる。「アーシャ」はビルマ語で「アジア」を意味する。

割」を、主人公の口から娘に対して語らせる。主人公は第一部分で、この戦争の目的が東亜の解放と人々の繁栄であり、大東亜共栄圏建設の理想のために命をささげる覚悟だと語る。第三部分ではさらに、共存共栄において日本のリーダーシップが不可欠であり、日本軍の完全勝利が独立ビルマの安定の保障であると語る。それによって作者は、日本軍の宣伝政策どおり「大東亜共栄圏建設と大東亜戦争遂行の意義」を民衆の一人である村娘に理解させ、「日本の行動に協力するよう導引」を果たしたことになる。

求められたテーマを主人公の演説の中に用いることで、作品はかろうじてプロパガンダ的役割を全うした。しかしこのような方法は、その芸術的完成度に必ずしも呼応するわけではない。そのことを作者は十分承知していた。その心情は序文の中に表白される。

序文で彼は、これが会心の作とならなかったと述べ、その理由として、応募作品に対する厳しい「制約」をあげる。そして「制約」が、第一に「大東亜共栄圏におけるビルマの役割」なるテーマを盛り込むという内容的制約であり、第二に申請用紙4枚以内に収めるという形式的制約であったとする。

これをさらに補足するのが、ジャーネージョー・ウー・チマウンによるいまひとつの序文である。彼は、この作品が「普通の小説ではない」がゆえに、「想像力のムシメガネで」、読者自ら想像を補って読まないと味わいがないと述べ、それでもなお作品の味わいが得られないなら、それは作者でなく読者の責任によるとまで述べる [Shwe Pein Thaung 1943: 1-4]。彼は、作品を精読することにより、行間に埋もれた真実を読み取るように、すなわち、何がどのように書かれたかのみならず、何がなぜ書かれなかったかをも理解する読み方を読者に求めた。

作品、作者序文、チマウン序文をあわせ読めば、これが心ならずも書かれねばならなかった不本意な作であることがうかがえる。「ボウ・アーシャ」が書かれた目的は、日本軍の宣伝政策にビルマ作家が「協力」したという既成事実作りだったのではあるまいか。とすればこれは、きわめて作為的な「プロパガンダ」小説であったといわねばなるまい。

(2) 受賞小説その2『刀』

ミンスエーが1943年に長編『刀』を執筆したのは、シュエーペイントアウンのように受賞を念頭においてのことではない。彼は、日本占領期以前より日本に親近感を抱いていた。それは、『刀』に先立つ彼の人気長編『血』（全2巻1940-41）からすでうかがえる。

『血』は、日本からビルマへ戻り、愛を成就せず再び国外に去る男キンマウンミンを主人公とする。「血」は、第一にキンマウンミンの激しい民族精神を、第二に文字通り身体を流れる血を意味する。第二の物質的な血液は、キンマウンミンと恋人キンチャミヤが愛の証として流してみせる血であり、最終場面近くキンチャミヤの夫とキンマウンミンとの小競り合いで両者が流す血である。

『刀』は、『血』における女性1名と男性2名の愛憎の枠組みと、主人公の激しい民族精神や抑制できない一方的情熱を継承した。キンマウンミンの武器はピアノだったが、『刀』

の主人公ヤンナウンのそれは、日本における伝家の名刀同様、由緒正しきビルマ族の伝家の名刀である。『刀』の主要舞台は、1941年末の開戦前夜から1943年8月の「独立」までのラングーンだが、冒頭で、1930年のターヤーワーディー地方の大規模反英農民反乱勃発のさらに3年前、同地における男女3名の幼少時のエピソードが葛藤の伏線として提示される。

ヤンナウンは、国家と民族に殉じることを喜びとする英雄であり、それにふさわしい家柄と容姿に恵まれる。彼は少年時代タイや日本で生活し、日本軍侵略を円滑になすべく、親英派を葬り去るテロリストとして、侵略前夜、刀とともにひそかに帰国した。作者ミンスエーは、ヤンナウンの思考を彼の心の内部から説明することを避け、残る男女2名の視点から、あるいはヤンナウンが直接彼らに語る言葉によって説明する。

ボウ・アーシャは当初からビルマ軍将校であるが、ヤンナウンもまた、日本軍による占領後はビルマ軍将校として姿を現す。ビルマ軍人の形象化は、日本占領期において文学に新たに登場した。シュエーペイントアウンは、主人公ボウ・アーシャと「国家」の運命を楽観的に描き出したが、ミンスエーはヤンナウンの運命に悲劇性をもたせる。彼はヤンナウンに「武士道精神」を説かせ、生きて虜囚の辱めを受けることより、抵抗し玉砕することを尊重させる。そして最後に彼は、「独立」の喜びに沸くラングーンで、満身創痕のビルマ軍将校ヤンナウンを、新たな戦闘へと雨の中を立ち去らせる²⁷。

ミンスエーがヤンナウンに語らせるのは、大東亜共栄の理想ではなく、美しく有益な死であった。1949年、ミンスエーの失踪直前に出版が準備された随筆集『名前』の中でも、彼は「爆弾三勇士」や「靖国神社」などに言及し、死ぬために好機を選び、死んで名を遺せと主張する。さらに、「虎は死して皮を遺し、人は死して名を遺す」を日本の諺として紹介し、ビルマ人に座右の銘となすよう説く [Min Swe 1997: kaji]。

ミンスエーが『刀』を創作したのは、「日本精神」への共鳴という、彼独自の内的衝動によるものであった。とはいえ、反英主義者であり、日本の玉砕の美学に心酔するビルマ民族主義者ヤンナウン像は、一にイギリス色の払拭、二に日本文化の普及、三にビルマ文化の振興という、2. (2)で提示した日本軍の文化政策の三要素を充たした。作家協会は、日本軍の文化政策の基本に合致した作品に文学賞を授与することで、「対日協力」の面目を果たした。「ボウ・アーシャ」の意図的作為的「プロパガンダ」性に対し、日本文化における死の「美学」を受容した『刀』は、他の時代ではなくまさに「日本占領期」の期間内に執筆出版されたことによって、「日本精神」の「プロパガンダ」的役割を果たす作品となった。

(3) 『刀』の周辺

日本占領期、ミンスエーはほかにも小説を出版した。それらは「プロパガンダ」的役割

27 『刀』の作品分析とその評価の推移等については [南田 2003b] を参照されたい。そこでは、ビルマ式社会主義下で厳しい批判の対象とされたこの作品が、現軍事政権下で青少年の必読文献と賞賛されていることにも言及する。

の作品と、ユーモア恋愛小説に二分される。前者で強調されるのは、「国家」への献身である。ここでいう「国家」は日本ではなく、彼の祖国ビルマをさす。彼は、「日本精神」をビルマの「国家」建設の精神的支柱として転用することを促したのである。

『刀』の「武士道精神」と男女3名の恋愛模様の枠組を継承した『殺す勇気のある人』(1944)で、ミンスエーは、竹槍訓練に余念のない、民族精神旺盛な三兄弟の次男が、隣家の親英的元官僚の一人娘に惹かれ、思いを遂げるまでを描く。しかしミンスエーは、愛の成就を肯定的にはとらえない。彼は、長兄ボウ・ヂーの口を通して、「殺す勇気」と「死ぬ勇気」を説く。最後に彼は、長兄をして末弟に対し、「国家」に命を捧げなければ、次兄のように結婚はすべきでないとさえ語らせる。

一方『復讐』(1943)²⁸でミンスエーは、主人公イエーディンに『刀』のヤンナウンや『殺す人』のボウ・ヂーらとは正反対の虚弱病弱の体質を与える。イエーディンは、「国家と民族」のために命を捨てることを切望している。死ぬなら多数のために死にたいと考え、ビルマ軍に志願する。しかし虚弱体質のため選考で落とされる。虚弱の原因が、父親の放蕩で性病の因子を継承したためだと判明すると、彼は父殺しをもくろむ。しかし父殺しに失敗し、病状を悪化させた挙句、精神病院で死ぬ。この作品でミンスエーは、独自の優性思想を披瀝する。すなわち、「国家」には人間が必要だが、「役立たず」は「国家」に不要であり、健康な人間のみが「国家」のために死ぬことを許されると説く。

このように、健康な肉体による「国家」への献身を説いたミンスエーは、長編『疎開娘』(1943)においては、男女3名の恋愛模様の枠組みだけを継承して、プロパガンダ性を全く排除した。彼は、「大東亜共栄交易協会」を解雇された青年、新規採用された女性書記、協会支配人男性の3名の恋愛模様を、度重なる空襲、灯火管制など首都の戦時世相を交えながら描き、裕福な支配人に貧しい青年と女性書記の愛を支援させて、幸せな結末で閉じる。このような作品は唐突に登場したわけではない。ユーモア恋愛小説もまた、ミンスエーの戦前からの小説のひとつの柱であった²⁹。

最後に、ミンスエーの日本占領期の作品の周辺で、注目すべき点を挙げておく。それは、『殺す勇気のある人』冒頭の、出版元アウン社による、ビルマ暦1306年ダディンヂェツ月(1944年9月-10月頃)付けの「小説は紙にあらざ」と題する一文の、以下のような一節である。

「紙は紙、小説は小説である。小説は紙にあらざ。紙もまた小説にあらざ。その意味するところをお考えいただいたら、裏紙で印刷したこの『殺す勇気のある人』にも、読者諸君は満足されるであろう。今や、紙を売るな、文を売れという言葉が登場している」³⁰

ここには、紙不足と紙の価格上昇に呻吟する出版界の窮状とともに、出版者の文学作

28 同書は戦後の1946年『悪い血』のタイトルで再刊された。

29 たとえば[Hkin San Tint 1986]でも、ミンスエーの戦前戦後の長編36編中25編の傾向について同様の考察がなされている。

30 [Min Hswe 1944]のページ表示のない部分で述べられる。この部分には、英文の建築図面の裏紙が使用されていた。

品出版への意欲が表明される。「プロパガンダ」的役割を果たした作品とその周辺は、日本占領期の文学界と出版界の内実をも語ったのである。

4. 日本占領期のビルマ文学 さらなる役割

(1) 娯楽的役割

日本占領期の受賞小説は、タキン・ルインのいうところの「日本ファシズムのプロパガンダ」的役割を果たしたかに見えて、それぞれ独自の動機から執筆されたものであった。では、彼のいういまひとつの、「国民の倫理道徳観を麻痺させる」役割を果たした作品は存在したのか。筆者の収集した限りにおいては、上述の『疎開娘』をも含めて、「倫理道徳観を麻痺させる」よりむしろ、戦時の厳しい生活につかの間の慰めを読者に与える役割、すなわち娯楽的役割が見出せるのみである。

単行本小説の中で多数を占めるものが恋愛長編である。の中には、英領時代を背景にしたものや、時代背景が明示されないものも少なくない。たとえばヤンアウン<1903-94>は、『愛の苦悩』(1942-44)³¹で、若い小説家に対する遠縁の娘の想いを当の小説家の視点から語り、『肩身の狭い人』(1942-44)では、富豪の娘との成就しない愛を農民の視点で語る。

このような恋愛長編で好まれる結末は、身分違いの愛における誠意の勝利であった。ザワナも『彼の妻』(1942)で、英領時代を舞台に、書記女性と富豪の愛が、脅迫、殺人、記憶喪失などの事件に見舞われながらも成就する顛末を描く³²。トゥッカ<1910-2006>も『愛してはいる』(1942)で、1930年から40年を舞台に、富豪の養子となった貧しい主人公の誠意と実の息子の放蕩とを対比させ、悪行が露呈した放蕩息子を出家させて、その婚約者と主人公の愛を成就させた³³。

トゥッカは戯曲も手がけた。日本占領期、映画の製作が中止され、職場を失った映画俳優が劇団を結成して全国を巡業した。上演作品の一部は、上演の前後に戯曲として出版された。トゥッカは、上述の『愛してはいる』はじめ、長編『尊厳が異なるのか』(1940年初版1945年改訂版)も『尊厳』のタイトルで戯曲化し、自ら舞台監督をも務めた。物乞いの娘と記憶喪失の裕福な青年の悲恋を描く『尊厳』は、日本占領期の観客の涙を誘って人気を博した [Than Nwe 1985: 23-24, 82-87]。

恋愛長編には上述のようなシリアスなものほかに、3.(3)で言及した『疎開娘』

31 書籍に出版年は記載されず、[Aung Win 1981-83: 201-202]で、出版年が1942年から44年とされる。『愛の苦悩』と『肩身の狭い人』は合本である。同書には近日出版予定として『真の警官』(テ IPPAN・チョーティン)、『切なくさせる』『ああ、愛、愛と』『美しい弟子』(以上ヤンアウン)、『愛してくれる?』『愛の涅槃』『何が愛だ!』『作家』(以上マハー・チョー)の広告も掲載される。このほかにも、ヤンアウンの長編『この世の涅槃』『兵士と愛妻』が1943年に出版されたとされるが、未見である。

32 ザワナは当時「ミャンマー・アリン」紙にコラム「言わせてください」を執筆していた。ほかにユーモア恋愛小説『袈裟を着る』(1943)を出版しているというが、未見である。

33 『愛してはいる』は加筆修正後1949年に再出版されている。トゥッカの日本占領期の小説はほかに『ああ女よ』『夫をもらおう』(1942)『愛したくないならそのまま』(1943)があるとされるが、未見である。

同様ユーモラスなものも存在した。たとえば、メーミョ・マウンは『作家』（1942）で、伯母の決めた婚約者を嫌って家出した娘を、独身作家の家に偶然転がり込ませ、その周辺に及ぼす波紋を描く。彼はこの作品を、ウー・ルンマウンの本名で、自分の所有する出版社から出版している。

上記の作品に日本占領期の雰囲気は希薄であるが、マハースエー〈1900-53〉は、日本占領期を舞台に時代風俗をちりばめ、笑いと風刺をきかせた恋愛長編を書いた。たとえば『僕が君なら』（1944）は、実業家の友人宅に居候する主人公に対して、友人の婚約者が戦争成金だと誤解したことから生じる喜劇である。『好きなものを選び取れ』（1944）は、活発で闊達な娘が、作家と画家と金貸しに求婚され、金貸しを選ぶ顛末である。この娘は、日本語が堪能な商売人で、日本人顧客を多数擁し、アジア青年連盟³⁴で護身術も習い、男顔負けの体力を持つとされる。

マハースエーのユーモア恋愛長編の筆は、恋人たちが結婚に反対する親と対決して勝利する『逆さま時代』（1943）で最も冴えを見せる。「逆さま時代」には、貧乏人が金持ちに、金持ちが貧乏人となる。娘の父親は大学教授をやめ、ホテルの支配人となっている。親子、男女の役割は逆転し、娘は父親に縁切り宣言をして、人力車を引いて無職の夫を養う。夫を自転車に乗せて走り回る娘を前に、父は土下座して関係修復を求める。戦争は、ビルマ人の規範、倫理、価値観を混乱させた。ビルマ人は、日本占領期いわゆる「日本時代（ジャパン・キッ）」を「崩壊時代（キッ・ピェッ）」とひそかに称した。マハースエーは、長幼の序を尊重するビルマ伝統文化とかけ離れた世界を展開することで、「崩壊時代」を風刺したのであった。

娯楽的長編には、恋愛もののほかに、ミステリー・冒険ものがある。メーミョ・マウンも、『ワ・タロン』（1942）で、英領時代の義賊ワ・タロンと悪漢トゥッピの対決を描き、ワ・タロンの正体が刑事で、トゥッピとワ・タロンが実は生き別れになった兄弟であることを明かし、二人の協力で親の仇である伯父に対する報復をとげさせる。またトゥカは、マハースエーと合本で競作『知恵者』（1943）を出版している。トゥカの『知恵者』（1940年初版）は、母の決めた婚約者である悪徳弁護士の悪事を暴き、貧しい作家を夫に選ぶ娘の知恵を描くが、マハースエーの『知恵者』（1943）は、1942年にいわゆる上ビルマの聖地ザガインに疎開した家族たちの日常の中で、邪な友人や退却する中国兵の横暴などと対決する青年の知恵を描く。マハースエーは結末で、ビルマ独立軍と日本軍による治安回復の迅速さへの感謝を付け加える「知恵」をも忘れない。

恋愛長編や、ミステリー・冒険長編の果たした娯楽的役割も、タキン・ルインのいう「倫理道徳観を麻痺させる」ものではなく、むしろ普遍的な人間の尊厳や誠意、ユーモアや勧善懲悪を提示し、現実にはそれらがまかり通りにくい「崩壊時代」の読者に、つかの間の

34 [太田 1967: 259] では、東亜青年連盟との呼称で、軍政監部の「内面的」指導の下 1942 年 6 月 28 日に、大東亜戦争完遂、共栄圏建設への積極的協力を目的に結成された。1943 年 7 月には 13 歳から 30 歳の男女会員 2 万名 210 支部を擁したとされるが、共産党のオルグや抗日闘争の隠れ蓑として活用された。

慰めと生きる勇気や、あるいは笑いを隠れ蓑とした世相風刺を提供した。

このような娯楽的役割を、あえてプロパガンダ的役割の対極に据えるとしても、実のところ日本占領期の文学の役割はこれらに二極分化していたわけではなく、中間に位置する啓蒙的役割が見受けられる。それを以下に見ていくこととする。

(2) 啓蒙的役割

大東亜共栄圏あるいは日本文化の「プロパガンダ」的な役割でもなく、恋愛、冒険、ミステリーなどの「娯楽」的な役割でもなく、ビルマ人の意識向上を啓発する啓蒙的役割を持つ作品群は、小説のみならず戯曲等のジャンルにも見られるので、ここではあわせてそれらにも言及する。

1942年12月、アジア青年連盟主催で首都ラングーンのカントーメイ館で『勝利の旗』7場(ゾーチー 1907-90)が上演された。それは、冒頭でビルマ独立軍旗の由来を説き、続いて過去の反植民地闘争において生じた諸勢力の不和・競合を示し、最後に「三十人の志士」がビルマを脱出して独立軍を結成するまでを描いて、軍旗に払うべき敬意を強調する。

また、1944年7月から9月には、首都3箇所の劇場で、一幕もののコメディ『何が一番重要か』(マウン・ティン 1909-2009)が上演された。そこでは、県知事の執務室に、軍人、警官、作家、アジア青年連盟員、その恋人、村長、物売りの女性、労務者として派遣するために連れてこられた村人、町長らが次々と登場し、各自が自分にとっての最重要な問題を主張し、責任を転嫁しあう。日本軍将校の来訪が告げられるが、姿は現されない。作者は観客に対して、ビルマ人同士の不和を認識させ、団結すれば解決できる、より重要な問題が存在することを暗示する。

1944年2月に上演された『新生ビルマ』三幕十六場(ニャーナ 1902-69)は、作家協会検閲担当執行委員ニャーナが、協会演劇部門の全面的支援で史料を駆使して執筆した。彼は、英国とビルマの植民地戦争の時代、ターヤーフデー農民反乱の時代、ビルマ独立軍の現代、各時代のビルマ人の戦いと死を描く中で、ビルマの民族的不団結が英国の侵略を招いたことを強調して、異民族に心を許さず、団結して誇り高く、「真の独立」を目指そう説いた。

1945年1月、首都ルイン館では、歴史劇『英雄の母』一幕(マウン・ティン)が上演された。ここで作者は、「重要な問題」をさらに明確に提示する。1930年、ターヤーフデーの反英農民反乱の敗残兵が母親の元を訪れ、官憲に逮捕され、指導者の居場所を教えるよう強要されるが、白自せず処刑される。母親は息子の死を悲しまず、息子が生命をビルマ解放に捧げたことを誇る。警察長官がそれに驚き、敗北感に駆られる一瞬も提示される。これは、反英闘争の時代を描きながら、すでに進行中であった地下の抗日闘争と官憲とのせめぎあいをも暗示するものであった。

戯曲でビルマ人に団結を説いたニャーナは、さらに、団結の前提となるビルマ人の意識改革をも中篇小説『ルー村とル村』(1943)で訴えた。「ル村」は不潔で、人々は罵倒しあ

い、奪い合う³⁵。村長は賄賂を取り、僧侶は由緒正しき南方仏教の教えに背いて呪術を操り、寺の小僧は殺生をする。神は、村の荒廃を憂う一人の若者を「ルー村」へいざなう。若者は、「ルー村」の人々が清潔で、正直で、秩序正しく、互いに助け合い、僧侶が清貧に甘んじて修行に勤しむ有様を見る。神は、「ル村」の人々が、もとは「ルー村」の人々と同族であったことを明かし、若者を「ル村」に戻す。若者は、「ルー村」における見聞を村人に説き、「ルー（人間）」の誇りを回復させる。ニャーナはこのように、寓意的にビルマ人に対して人間としての自覚を促し、人任せにせず自らの力で改革に励むよう説いた。

批判の矛先を、占領者たる日本軍ではなくビルマ人自身の資質に向け、その啓蒙に努めた作品には、このほか、長編『残酷なことよ』（1943 タキン・ヌ 1907-94）がある。作者は、異民族よりむしろ同胞の残酷さを冷徹に描く。たとえば彼は冒頭で、ビルマ人はいつも微笑していると外国人から言われるが、それは微笑ではなく笑いであり、彼らは食事中も、外出時も、たとえ野辺送りであっても笑っていると、ビルマ人の微笑を揶揄する [Nu 1983: 60]。これに続いて作者は、英国の支配下で一人の愚直な農民がビルマ人官憲に陥れられ、監獄で残虐な拷問を受け、絶望して自殺するまでを描く。人間の誇りを失わせる拷問のシーンは、読者に日本軍のそれを彷彿とさせるものとなった。

一方ウー・ラも、父が息子に与える書簡『請願男子』（1944）で、慎重に言葉を選んで、この時代を生きる知恵を示し、「祖国」再建に尽くすよう求めた。フィクションの体裁をとるが、父母の名前のみを変えて、内容はすべて事実に基づいたものだという³⁶。ウー・ラはすでにこの時期、抗日活動に従事しており [Nyun Aung 2000: 243-246]、息子への言葉を借りて、国民に意識の改革を促したのである。

これらの作品では、ビルマ人の意識改革と団結が、真の独立の武器とされる。その意味で、これら啓蒙的作品は単に啓蒙にとどまらず、ビルマ作家によるひそやかな抗日「プロパガンダ」的役割を果たしたといえよう。

娯楽的役割、啓蒙的役割の作品では、日本との協力や大東亜共栄の重要性は語られない。これらを見る限り作家たちは、作品を日本のプロパガンダに利することを潔しとせず、ある者は娯楽作品によってプロパガンダを回避し、ある者はビルマ人の意識改革と団結を目指して、啓蒙的作品の行間を抗日「プロパガンダ」にひそかに利用したといえよう。

啓蒙的役割の小説はこのほかにも存在するが、それらには別の意味合いも見出せるため、6.（1）であらためて取り扱うこととする。以下では、このような長編の果たした役割が、作家協会機関誌『作家』掲載の短編中編小説にも呼応するものであったかを検証する。

35 ビルマ語の第二声調の名詞「Lu」は「人間」を意味し、子音文字 La に「二本足」との名称の母音符号を付加する。一方第一声調の動詞「Lu」は「奪う、盗む」を意味し、子音文字に「一本足」という名称の母音符号を付加する。

36 ウー・ラの妻で作家のロードゥ・ドー・アマーへの 2003 年 12 月 29 日のインタビューによる。詳細は [南田 2004: 102-103] を参照されたい。

4. 日本占領期の短編小説 『作家』 掲載小説に見るその役割

(1) 新しい人物形象 ビルマ軍将兵

『作家』は、編集責任者ジャーネージョー・ウー・チマウン、編集補佐ザワナにより1942年12月に、84ページ立てで、価格100銭で創刊された³⁷。

『作家』は、日本占領期に継続的に刊行された唯一の雑誌であっただけに、内容も、小説、詩、歌、童話、書評、古典文学解説など文学関係のほか、時事評論、外国事情、戦争体験記、ビルマ歴史文化、日本文化紹介、日本文学翻訳など多岐にわたる。執筆者は70名を越える。その中には、戦前からの有名作家もいれば、全く無名の作家もいる。作家協会の活動記録に名を留めるにもかかわらず、『作家』執筆者に含まれない者もいることから、彼らが別名で執筆した可能性も考えられる。たとえば、『刀』の著者ミンスエーは、「キンソン」という女性名を用いたことが判明している³⁸。

『作家』1号から11号までに掲載された短編・中篇小説は44編ある。その中で、ビルマ軍将兵を主要人物とした作品が11編を占める。二つの受賞作「ボウ・アーシャ」と『刀』同様、ビルマ軍将兵の形象化は日本占領期の小説の新たな特徴であるので、ここで別個に取り上げておく。

ビルマ軍将兵を主要人物とした11編中7編は、彼らの恋愛を描く。たとえば、軟弱な青年が曲折の後軍人となり、愛を成就させる「この戦略」(1943年5号キンソン)、軍務遂行と結婚との両立を説く「真実の愛」(1943年7号マハースエー)「前進—前進」(1943年9号イエーナンヂャウン・ミョウミン)のほか、日本帰りのエリート将校の失恋を描く「忘れないね、忘れない」(1944年11号ミンダー)や、軍人となった息子のおかげで年若い恋人と再婚できた父親を描く「国軍」(1943年3号ティンカー 1909-97)などユーモラスなものもあるが、「町の捕虜」(1943年6号ボンチュエー 1921-48)「美文」(1943年8号ヤンゴン・バスエー 1918-86)など、戦争で引き裂かれた愛の悲劇を描くものもある。これら恋愛ものにおける「英雄たち」の形象化は、読者にビルマ軍への親近感を増幅させる役割も果たしたといえよう。

ビルマ軍将兵に対する啓蒙的役割を果たす作品も見られる。たとえば、軍のために愛を捨てる「グラジオラス」(1943年5号イエーナンヂャウン・ミョウミン)、脱走兵となった友人を軍の名誉にかけて制裁する「同志」(1943年6号ダゴン・ミャッレーヌエー 1911-91)などの滅私奉公ものである。

このほか、空想的未来小説の形式で、ビルマ軍への忠誠を語る作品もある。たとえば、「尊き兵士」(1943年5号ティンカー)は、日本占領期の30年後のビルマを舞台に、国境地

37 月間と銘打たれたが、1943年は2号から9号までの発行である。ページ数も、7号までは70ページから80ページ立てだが、8号(独立記念特集号)が64ページ、9号(ビルマ暦ワーガウン月<7月から8月頃>発行)がさらに40ページと、減少の一途をたどる。価格も1944年の10号(世界新年特集号<1月>)が40ページで200銭、11号(ビルマ暦ワーゾウ月<6月から7月頃>発行)が40ページで300銭と急騰している。価格は掲載されないものもある。現在確認できているのは11号までである。

38 ミンスエーの長男で作家のアウンモーへの2004年12月30日のインタビューによる。なお、アウンモーによれば、『作家』掲載広告のキャッチフレーズなども、作家たちが手がけたという。

帯の「反乱軍」制圧に出征する息子を見送る元将校の感慨を描き、「セイタカアワダチソウ」(1943年7号アウントゥー)は、空軍を持たなかったはずのビルマ軍において、「空の勇士」がランゲーン上空で空中戦を展開して玉砕するさまを描く³⁹。

これら以外に、負傷兵を扱った短編らしき「愛国の勲章」(1944年10号ティンカー)が見出されるが、導入部のみで中断されている⁴⁰。

4. (2) で言及した戯曲に、ビルマ王朝の崩壊からビルマ民族の苦境を経てビルマ軍の登場で結ばれる枠組みが用いられたように、啓蒙的役割の作品は、日本軍ではなくビルマ軍を祖国再建のリーダーとして読者に意識させた。その意味で、これらビルマ軍将兵を形象化した短編は、ビルマ軍のひそかなプロパガンダ的役割を担ったのである。

(2) その他の作品 娯楽的役割

ビルマ軍将兵を主要人物としない『作家』掲載短編は33編ある。おおむねそれらも、長編の役割に呼応して、娯楽的役割を担う作品が多い。中でも恋愛物が最も多く、15編である。悲恋ものでは、日本占領下におけるラジオ放送を契機とする昔の恋人との再会と別れを描く「恋人の歌声」(1943年2号ミヨマ・ボンチュエー)、男が妻のもとへ戻る日、男の恋人が井戸に身投げする「愛したから」(1943年4号ボンチュエー)⁴¹、幻のバイオリン弾きに恋した娘が、苦悩のあまり絶命する「執心 あなたの心に」(1943年4号グエーター—女性1925-58)などがある。最後の作品のみ、時代背景が明瞭ではない。

ユーモラスな恋愛ものでは、日本占領期以前を背景として、惚れた娘の兄たちに襲撃されて負傷した男が、娘の同情と愛を獲得する「痛い恋人」(1943年2号マハースエー)、幸せな愛に水を注そうと悪友たちが策をめぐらす「別れないよ」(1943年3号ティッパン・チョーティン)などがある。日本占領期を背景としたものは、独身を偽ったため2人の女性から追われた男が仏門に逃避をもくろむ「沙弥の問題」(1943年2号マウン・スエーティン)、正直者が商売と恋愛に成功する「新時代のビルマ人」(1943年7号ヤンアウン)、疎開中の宿坊生活で若者が身分違いの娘の愛を獲得する「宿坊の人」(1943年ムントーター)、空襲で家族を亡くした衝撃で気がふれたと偽る男が、娘の同情と愛の獲得をもくろむが失敗する「気のふれた男」(1943年6号マハースエー)、女子医学生の歓心を買おうととして聴診器を盗んだ男が、逮捕されるが愛は獲得する「聴診器のために」(1944年11号マハースエー)などがある。「宿坊の人」の作者ムントーターは、マハースエーの別名である。彼の3短編は、前述の長編同様に、単なるロマンチック・コメディにとどまらない。空襲や列車の混乱など、「崩壊時代」の世相風刺も控えめに挿入されている。

その他に、男女のかかわりの悲喜をこもごも描く作品がある。日本占領期以前を背景とするものは、賢妻を亡くし、娘のような若い愚妻を得た男が苦勞する「二種類の妻」(1942

39 日本占領期の作品は入手も困難なうえ、メディアで紹介されることも希だが、この作品についてはアウントゥーの長編とあわせて[Than Nyunt 2004]が詳細に言及する。

40 導入部ではあるが、負傷兵の苦悩が読み取れる作品で、中断は検閲によると推測される。

41 ミヨマ・ボンチュエーに同じである。

年1号アウントゥー)である。時代背景が明示されないものは、「最後の一葉」(O.ヘンリー)の翻案と思しき「一枚の木の葉」(1944年11号ミンスエー1911-1990)である。日本占領期を背景としたものは、結婚まで処女だったはずの妻が実は子持ちだった「本物の処女」(1943年3号ヤンアウン)、亡霊となった妻が転生後、夫の結婚を妨害した末に再会を果たす「特別な妻」(1943年5号同)などである。

それらのほかに、ミステリー・冒険ものがある。自分が陥れた男の報復を恐れた主人公が自殺する「時の応報」(1942年1号ティリマウン)、殺人の嫌疑を晴らす敏腕弁護士 of 調査を描く「犯罪者の足跡をたどる法(2)」(1943年8号ダゴン・シュエーフミヤ1895-1982)など、時代背景の明瞭でない作品もある一方、画家の恋愛にカルト的要素を加えた「奇妙な夢」(1943年2号同)、戦争成金のブローカーの愛と復讐のミステリー劇「蜂蜜とU字鋼」(1943年4号同)、英国軍撤退時に拉致されて逃走する医師が、中国兵の暴挙に屈せず生還する顛末「ソーヤ・テッピン」(1944年11号作者名なし)⁴²など、日本占領期を背景とした作品もある。これら短編は、長編よりさらに多様な人物模様を細やかに展開して、戦時下の読者を楽しませる娯楽的役割を全うしたといえよう。

(3) 啓蒙と風刺

啓蒙的役割を果たしたといえる『作家』掲載短編は、5編ある。それらにおいては、啓蒙を超えてむしろビルマ人の政治的自覚を促すメッセージ性が濃厚となっている。たとえば、「お尋ね者」(1942年1号ミョマ・サヤー・ヘイン1905)は、日本軍の侵入直前、英国植民地政府の逮捕を免れた男の潜伏生活を描く。また、政治活動に失望した青年に対して、彼の恋人が大東亜共栄圏におけるビルマの役割の大きさを説いて励ます「愛の言葉」(1943年4号タキン・ハントウン)は、一見日本のスローガンを強調するかに見えて、主眼はビルマの政治状況に置かれる。

「農民の世界」(1943年5号)「木材伐採人夫」(1943年8号)は、ともに労働の過酷さを描き、特に後者では労働こそが富を生み出す価値を持つと結論付ける。これらはモーチュン・トーダーガレー(モー島の田舎者)なる新奇な筆名で執筆され、有名作家が別名を用いた可能性も考えられる。同様に、「独立」を機に完全な権利を獲得すべきだと大胆に説く「心」(1944年11号フニンメー女性)もある。

世相風刺的役割を果たす短編においては、その役割は長編以上に顕著に見られる。それらは8編ある。「アウンマウン」(1942年1号ティンカー)は、犬の視点から空襲を描き、「説教師」(1943年4号トゥカ)は、若者に志願を呼びかける説教師の滑稽さを描く。「これは誰か」(1943年4号イエードゥー)は、日本兵が来襲したと偽って英国兵を撤退させた男の「機知」を、「赤い雌犬」(1943年7号同)は、空襲予知能力を持つ犬を描く。「イエ

42 マハースエーの長女で、作家キンスエーウーへの2004年12月31日のインタビューによれば、この作品の作者はマハースエーである。ソーヤ・テッピンは主人公の名であり、彼を主人公とした冒険シリーズは戦前から有名であった。しかしこの作品は、覆面作家が書いた体裁をとり、作者がマハースエーであると知る者はいなかったという。

ードゥー」なる筆名も「書く人」「作者」を意味し、有名作家の別名である可能性がある。「これなのだ」(1943年7号シュエーウダウン1889-1993)は、空襲を恐れず防空壕に避難しなかった男が、自分の死の模様を語る。有名作家シュエーウダウンもこの作品では、発音は同じだが本来とは異なる綴りを作者名に使用する。検閲を慮った作家たちのさまざまな工夫が見出せる。

マンティン<1917-97>は、「競売」(1943年5号)「昔々」(1943年9号)で、英領時代の村人たちの不法行為を描き、まさか現代にこんなことはなかりうと結んで、それとなく時代を揶揄する。彼はまた、「行き過ぎた親切」(1943年8号)で、地主の娘たちが、町から来た日本語家庭教師のビルマ青年によせる好意の滑稽さを描く。これは後年、ファシストへ行き過ぎた好意を寄せる人々を皮肉った作品として評価された[Kyaw Aung 1975: 133]。

『作家』の短編は、ビルマ軍将兵という新たな人物形象を読者に提供することによって、ビルマ軍のひそかなプロパガンダ的役割を果たした。そのほか、恋愛もの、冒険もの・ミステリーものなどを提供して娯楽的役割を果たした。『作家』の啓蒙的役割の短編は、ビルマ人向け「プロパガンダ」的役割を長編より顕著に果たした。さらに『作家』の短編の一部は、ロマンス色を全く排した風刺的役割をも担った。風刺的役割は6.(1)で言及するように、長編でも若干見られるが、短編においてその本領が発揮されている。

6. 「プロパガンダ」は誰のためか

(1) 日本軍将兵の形象化

日本占領期の小説の役割は、タキン・ルインのいうファシズムのプロパガンダと倫理道徳観を麻痺させる役割に二極分化していたわけではなかった。日本軍のプロパガンダ的役割を果たしたと目される受賞作にも、ビルマ側の思惑が潜んでいた。娯楽的役割の作品も、ビルマ人の意識を眠り込ませるに程遠く、啓蒙的役割や世相風刺的役割の作品は、ビルマ人の意識改革から抗日まで、ひそかなプロパガンダ的役割を果たした。さらに、ビルマ軍のプロパガンダという新たな役割をも担う小説が登場した。

文学の「暗黒時代」の要素である用紙不足については1.(1), 2.(2), 3.(3)などで述べたが、いまひとつの要素である検閲や言論統制の内実に迫るには、作品収集同様の困難が予測される。ここでは、作品そのものから検閲状況を推測することによって、日本占領期における小説の役割をさらに確認していきたい。

この時期の啓蒙と風刺の作品は、ビルマ民衆の言行の暗愚の部分のことさら誇張する傾向があった。その最たるものは、随筆集『小父さんが話そう』(ザワナ1942年11月出版)である。作者は、「崩壊時代」たる日本占領期のビルマ民衆の精神崩壊をも余すところなく風刺する。彼は、1942年3月の英国軍逃走直後、首都ラングーンで生じた、ビルマ人による火付け、殺人、押し込み、強奪、泥棒市場などの地獄絵図を描き、日本軍の入城が

遅れたら事態は悪化していたらと周到に結ぶ⁴³。民衆の暗愚の強調は、それを「導引」すべき存在を際立たせる意味で、検閲に許容されたと推測される。

一方1. (2) で述べたような、日本占領期を背景とする戦後小説に不可欠の構成要素であった日本軍将兵の形象化は、日本占領期の小説においては曖昧である。「ファシズムの権化」はもとより、「友好的」日本人の形象化も見出せない。日本精神に惹かれたミンスエーの日本占領期の作品にも、日本人は登場しない。ビルマ軍将校とビルマ英国混血看護師との愛と別れと再会を描いた、終戦直後の長編『愛と国家』(1945)で、彼はわずかに日本人を登場させる。英国軍の捕虜となった主人公は、同じく捕虜だった日本兵とともに脱走する。抗日蜂起後再会したその日本兵の潔い死が、主人公に感銘を与えるとされる。

日本文化の心酔者ミンスエーまでが、日本人の形象化を日本占領期終焉まで控えていたことから、この時期の検閲者がそれを制限していた可能性はうかがえる。またその一方、ビルマ作家自身が意識的に自主規制した可能性も残る。この問題は、更なる作品収集等とあわせて今後の課題としたい。

ただ、戦後小説におけるような、名前と顔を持つ明確な日本人像が欠落していたとはいえ、日本あるいは日本人の姿は、風刺と啓蒙の若干の作品で漠然と描かれている。たとえば、メーミョ・マウンがシュエーアの別名で、「崩壊時代」を一人称の冒険譚に再現したユーモア風刺小説『新時代のラングーンとは』(1943)『疎開とは』(1944)では、主人公が自分自身を笑いものにながらも、自分を嗤った相手を憎悪しつつ、読者を抱腹絶倒の境地に誘う。前者の主人公は、田舎で強盗団に加わろうとして気が変わり、商店に押し込んで一山当てようと、仲間とラングーンへ向かう。途中日本兵に会うが、日本語を知らない主人公は、日本兵の発する日本語の発音「ビルマ」を「アベイダマ(哲学)」⁴⁴と取り違え、日本兵から「ミズ(水)」と言われて、ミ・スという名の売春婦を紹介する。日本兵に椰子登りや按摩を命じられた後、やっとたどり着いた首都では予防注射を何度も打たれ、日本兵の集団水浴の現場に迷い込んで「ウナギのような」裸体に目を覆い⁴⁵、「新時代」の首都風俗からほうほうの体で逃げ出す。

ビルマ人の暗愚を嗤いながら、日本兵の言動も巧みに練りこんだこの大胆な物語で、作者は多くの比喩や遠まわしの表現で検閲を切り抜けた。作者は、「新時代」という「独立」ビルマ政府のスローガンをタイトルに使い、日本兵を「ジャパン・スイッデードー(日本の兵隊様)」あるいは「コウ・パン(パン氏)」と呼び、各章ごとに作品内容と無関係な「大東亜共栄圏」や「独立」礼賛のスローガンを挿入する。しかしその一年後に出版された『疎開とは』には、日本兵はもはや登場しない。作者は、イラワジ・デルタのヒンダダへ疎開

43 ジャーネージョー・ウー・チマウンはその序で、本書が第二次大戦前『ジャーネージョー』誌に連載されて好評を博した「小父さんシリーズ」の一環であるが、とくに「日本時代」版として書き下ろしたものと説明する。

44 日本語の「ビルマ」は明治以来使用されてきたオランダ語であり、ビルマ人自身は「バマー」「ミャンマー」を用いてきた。これは「独立」後も併用されてきた。

45 ビルマ人は水浴時もロンジーを身につけており、裸体とはならない。日本人の裸体での行水、水浴は当時野蛮な行為として語り草となった。

していた主人公を、金儲け話に乗せて首都へ送り込む。そして無人の商店から商品を多数盗み出させ、無事帰還させる。主人公は盗品の用途を理解せず、酢を酒と、石鹸をトフィーと、便器をスープ鍋と取り違え、大恥をかき、町にいたたまれず逃げ出す。日本兵の形象化消失の背景としては、反日感情の高まりや、抗日運動を意識した検閲側の規制が考えられる。

アウントゥーも、『新聞記者作家』(1943)に、日本を象徴する用語を巧みにちりばめた。主人公は、新聞記者兼作家の作者自身である。月給が一割上がっても、物価上昇が4、5倍では、3人の子供も養えず、朝刊を売って月給の倍の収入を稼ぐ主人公の生活と意見が、作家アウントゥーのファンである裕福な娘との交流を通して語られる。

作者は主人公を、式典に盛装でなく普段着で列席させ、そのような格好では「労働者狩り」に遭うと娘に心配させる。そして、娘に対して主人公に、今はぼろを着ていても、「独立」ビルマの作家は、3年後邸宅に住み車も持てると豪語させる。作者はまた、作品の表紙と結びに、「びんたを張られた人アウントゥー」とのキャッチフレーズを用いる。これは、新聞売りから自分は作家アウントゥーであると告白された娘が、それを偽りだと誤解して怒り、作家の頬を打つ場面に由来する。「びんた」は、日本軍においては日常的習慣であるが、誇り高いビルマ人には尋常ならざる行為であった。長幼の序と男女の役割分担を重んじるビルマ文化において、若年女性が年長男性を殴ることは尋常ではない。これは、日本兵の「びんた」を意識した作者の挑発的表現であった。

本稿で扱った日本占領期の小説の多くが、戦後は再版されていない。これに対して、戦後も版を重ねるジャーネージョー・ママレーの『彼女』(1944)は、友人が紛失した大金を弁済するために、「独立」ビルマ政府の独身大臣の男所帯に住み込み、家政を仕切るビルマ女性の勇気と聡明さと献身を描くものである。担保となった孔雀像にはビルマ民族の誇りが秘められ、大臣は当時抗日活動もしていた実在の人物をモデルにしている。作者はビルマ女性への啓蒙を意図して、傑出した女性像を提示したのであるが、この作品にも、疲弊した日本兵、日本兵を恐れて戸締りを強化するビルマ人、品物不足、空襲など、時代の現実が随所にちりばめられる。

これらのことから、検閲は日本軍将兵の形象化を厳禁したわけではなく、状況に応じて許容していたことがうかがえる。しかも、その形象は美化されず、むしろ醜悪滑稽なものであった。このような作品を、「日本軍の宣伝活動」の一環とみなして出版の判断を下し、希少な用紙の提供を許可した人物とは、何者であったのか。仮にそれがビルマ語作品を深く読み取れる日本人であったとすれば、同胞の醜悪な形象化は日本軍の宣伝に不適切だとして、たちどころに出版不許可の断を下したはずである。すなわち検閲者は、「日本ファシズムの宣伝に資する」視点からではなく、ビルマ民族解放に資する視点から作品を精査したと考えられる。少なくともその一人が、ビルマ的立場を堅持したビルマ人であったことは、いくつかの証言が明らかにしている⁴⁶。それによって日本占領期の文学は、ビルマ

46 [南田2009]も参照されたい。2003年8月18日作家テッカドウ・ティンヂーへのインタビュー

側に資するさまざまな役割を秘かに果たすことが可能となったのである。

(2) ビルマ軍将兵の形象化

作品を精査する者が上記のようなビルマ人であったことによって、文学に与えられた役割は新たな意味合いを持ち始める。ビルマ民族解放の立場を重視する検閲者にとっての関心事は、日本軍将兵の形象化よりむしろ、ビルマ軍将兵の形象化であった。民衆の暗愚の誇張を検閲者が許したのは、それを導引すべき存在として、日本軍ではなくビルマ軍の高潔さが強調されると判断したからではなかったか。

このように、検閲者がビルマ軍将兵の形象化を注視していたことは、日本占領期終焉直後に出版された二作品が明らかにしている。その第一は、前述のジャーネージョー・ママレーによる長編『アピュー』(1945)である。一般に『彼女』がママレーのデビュー作であるといわれるが、それ以前に『アピュー』は執筆されていた。『彼女』の主人公テッテツの原型は『アピュー』の主人公アピューにある。作者は『アピュー』が日本占領期の検閲では不許可となることを予測し、出版を見合わせた。しかし『アピュー』のタイプ原稿は、日本占領期にひそかに回し読みされたという [Ma Ma Lay 2002: preface]。

植民地官僚の娘アピューの名は、純粹高潔な「白色」を意味するビルマ語でもある。彼女の恋人は反英活動家で、1941年に日本に渡った。1942年、彼女は疎開先で環境改善に奔走し、ビルマ軍の行政機関の指導者の横暴と闘う。彼女はビルマ軍指導者として帰国した恋人を探して、軍基地を訪れるが、スパイの嫌疑を受け、恋人の到着直前処刑される。アピューの崇高さは、彼女に言い寄る行政機関の指導者や尋問者であるビルマ軍将校たちの野卑さと対比される。この作品には日本人が全く登場しない。にもかかわらず、作者が検閲による不許可を予測したのは、ビルマ軍の否定的側面が描かれていたためであろう。

第二の作品は、マハースエーの終戦直後⁴⁷の長編『戦地と愛の清流』(1945)である。同作品の作者序文からは、ビルマ軍将兵の形象化が検閲で注視されていたことが、より明白うかがえる。序文で作者はまず、「当時ビルマ軍に関する小説、著述は、国防省関係部局の命令が出なければ出版できなかった」と述べる⁴⁸。続いて彼は、この作品を1944年、『タボイの戦闘魂』のタイトルで出版申請したが、不許可となったことを明らかにし、それに関して以下のような関係資料を提示する。

第一の資料は、1944年2月15日付で彼が国防省宛に提出した書類である。彼はこの作

によれば、彼は1942年から43年、同盟通信に勤務し、日本側とビルマ側の双方から検閲を受けた。ビルマ側責任者は前述の作家協会再建に尽力したコウ・サウン（三十人の志士として海外で軍事訓練を受け1942年ビルマ軍に所属して日本軍とともに侵入したボウ・ティンウィンで日本名は門谷）であった。彼がビルマ人の立場で検閲に従事していたことは [Yan Aung 1967: 315-318] も言及する。なお [太田: 597] によれば、「独立」ビルマの新聞雑誌および書籍の統制は厚生宣伝省直轄下にあり、大臣バンドゥラ・ウー・セイン、次官ウー・ティンスエー、宣伝局長ウー・トゥンセイン、第一次長ウー・バニユン、第二次長ウー・マウンマウンビエであった。

47 1945年5月から1947年12月までの英国による再占領時代の出版作品は、日本軍ビルマ軍の検閲とは無縁であるため、同じ作者の日本占領期の作品を理解する手立てとしても貴重である。

48 [Maha Hswe 1945: 1-5] によるが、1943年8月の「独立」後のビルマ軍にかかわる著述は国防省、それ以外の著述は厚生宣伝省と、検閲が分担されていた可能性も考えられる。

品が、青年の戦意昂揚、この戦争への関心の喚起、戦争への献身というビルマ軍のプロパガンダに應えるものであると述べ、出版同意書とともに、用紙の合法的購入を妨害しないよう関係方面に口添えする文書の交付を求めている。

第二の資料は、国防次官ボウ・レチャーが国防省軍事教練局長あてに、一軍人の手記であるこの作品の出版の可否を、5月20日までに知らせよう命じる1944年5月13日付の書簡である。

第三の資料は、軍事教練課のボウ・ポウクンが作者宛に、作品は愛に惑溺した兵隊を描き、軍事より恋愛を優先するため、ビルマ軍人の範とはならず、ビルマ軍人の闘争心を減退させるものであり、ビルマ軍を過小評価するものであるとの理由で出版不許可となった旨通達する書簡である。

この作品は、タボイ出身の兵隊が作者マハースエーに手渡した手記とされる。そこでは、祖国のために命を懸けていた兵隊が、ランゲーンで恋に落ちてから恋人と別離するまでが綴られる。24歳の彼の苦悩は、25歳以上にならないと結婚できない軍規や、恋人よりも彼が貧しいことなどである。主人公はこの戦争が、「ビルマ人のための戦い」だと認識している。また、主人公が幹部候補生時代、日本人教師からびんたを張られ、所持品検査を受ける場面も描かれるが、この部分は上記の検閲不許可の理由にはあげられていない。

1945年日本軍が敗退し、英国に再占領されたビルマで、マハースエーは『タボイの戦闘魂』に加筆して、同書を『戦場と愛の水流』の名で出版した。加筆部分は、主人公がその後抗日闘争に参加し、日本のスパイを殺害し、日本軍憲兵に追われ、その中で新しい恋人と出会うという後日譚であった。

『作家』掲載の短編小説の一部からも、うかがえたように、日本占領期の小説が担ったプロパガンダ的役割とは、日本軍や大東亜共栄圏のそれではなく、ひそかな抗日やその主軸たるビルマ軍のプロパガンダとしての役割であった。そのことをより明確にしたのは、日本占領期終焉直後、英国再占領下に出版された上述のような作品であった。

おわりに

日本占領期、ビルマ作家は、日本軍の宣伝政策を利用しながら、作家協会を再建し、文学賞を設置し、諸行事を举行し、用紙を獲得して協会機関誌はじめ書籍を発行した。この時期の文学は、本稿で小説を中心として検証した限りでは、戦時の厳しい生活に癒しを与える娯楽的役割とともに、啓蒙や風刺的役割をも包括して、ビルマ人の意識を改革し外国人の支配から独立した国家を建設するためのひそかなプロパガンダ的役割をになった。日本軍や大東亜共栄圏のプロパガンダを期待された受賞作も、作家たち独自の思惑から執筆されたものであった。

また日本占領期の検閲は、ビルマ民衆の暗愚の描写や、日本あるいは日本人のおぼろげな描写を許す一方で、ビルマ軍の否定的側面の描写を厳禁した。それは、文学がビルマ軍のプロパガンダ的役割をも果たすことが、彼らに認識されていたことを意味する。日本占領期は、作家協会、文学賞、文学者の日など諸行事とともに、検閲制度をも後世に遺した。

それでは、タキン・ルインが『日本時代のビルマ』で文学の二極分化を説いたのは、いかなる理由によるものか。なるほど、強権政治下においてプロパガンダ作品は権力の維持に直接的に貢献し、退廃的作品は読者の覚醒を妨げる意味で間接的に貢献する。タキン・ルインは、ビルマ式社会主義下の1968年同書を著した。彼がその当時の言論出版状況からの類推を、そのような言論統制の種をまいた過去の日本占領期の文学状況に適用した可能性も考えられる⁴⁹。しかし彼は、反植民地闘争、抗日闘争、戦後は労働運動にもかかわってきた [Shwe Hmya 1971 : 327]。著述家となったのは戦後だが、日本占領期に読者として文学に触れたことは想像に難くない。彼が二極分化説を唱えたのは、本稿で扱った作品のほかに、その根拠となる作品が多数存在したためか。それとも別の意図の下にそれを唱えたのか。その解明には、更なる作品の収集を待たねばならない。

参考文献

(ビルマ語)

- Aung, Shwedon B, 1946, *Pyaukcha 9*, Duwun Press, Yangon.
- Aung Htu, 1943, *Saye Hsaya Dhadinza Hsaya*, Myanmar Alin Press, Yangon.
- Aung Hla Soe, 1977, *Japanhkit hnit Satlyindhaw Myanmar Hmattan Saoukmya Letlagyet (1942-1977)*, MA thesis, Yangon University transcript, Yangon.
- Aung Win, 1981-83, *Myanmar Wuthtushe Sazu Sayin (1931-44)*, MA thesis, Yangon University transcript, Yangon.
- Ba Than, UPI, U, 1978, "Myanmar Naingngan Dhadinza Thamaing", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol.1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 1-75.
- Chit Hla, 1995, "Maung Koza Thinpyanledhala", *Taing Zeya*, Jul., Mandalay, pp. 123-136.
- Hla, Ludu U, 1944, *Hsuhtu Pan Yaukkya*, Kyibwaye Press, Mandalay.
- 1968, *Dhadinzamya Pyawpyade Sittwin Bama Pye*, Vol. 1-4, Kyibwaye Press, Mandalay.
- Hla Htwun, Maung, 2004, *Japan Hkit Myanmar Gabya Sadan*, Pyinnyaye Sounnyi Pwedaw transcript, Yangon.
- Hlaing, Tommy, 1978, *Sitkyo Sittwin Amyodha Hloukshahmumya hnit Gita Sapay (1930-1945)*, Yangon University transcript, Yangon.
- Hnin Oo, 1954, "Yoshihada", *Myawaddy*, Mar., Yangon, pp. 165-174.
- Houng, U & Khin Aye, U, 1975, "Myanmar Wuthtu", *Myanmarhmu* Vol. 1, Tekkadhomya Saouk Toukweye Committee, Yangon, pp. 138-166.
- Htay Maung, 1978, "Kalay Lunge Sapay hnit Sanezinmya", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 185-217.
- 2002, "Sit atwin Kala Saouk Sadanmya", *Lonmalay Magazine*, Oct., Yangon, pp. 136-139.
- Htin Gyi, Tekkadho, 1992, *Myanmar Naingngan Dhadinzamya Anyunt*, Vol. 1, Sapay Beikman Press, Yangon.
- Htin, Maung, 1957, *Ba Aye Akyizounle hnit Azani Migin*, Thekdi Press, Yangon.
- Khin San Tint, Ma. 1986, *Min Hswe i Wuthtushe Letlagyet*, Yangon University transcript, Yangon.
- Kyaw Aung, 1973, "Myanmar Wuthtushe", *Saouk Sapay*, Vol. 1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 24-54.

49 [南田 2001] で言及するように1962年に始まるビルマ軍によるビルマ式社会主義下で、文学は社会主義建設にイデオロギー的側面から貢献する役割を与えられたが、検閲は純文学を厳しく精査しながら、大量の娯楽小説の出版を許してきた。この傾向は現政権下にも継承される。

- Kyaw Aung, U & Kyaw Hswe, U & Maung Maung, U, 1975, "Myanmar Wuthtudo", *Myanmarhmu* Vol. 1, Tekkadhomya Saouk Toukweye Committee, Yangon, pp. 121 – 137.
- Lay Loung, Ma, 1963, *Pwin*, Hswe Tin Nu Press, Yangon.
- Lwin, Thakin, 1969, *Japan Hkit Bama Pye*, Udan Sapay Press, Yangon.
- Lwun Kyin, Maung, 1982, "Bedho Hpyetheinyamini", *Shumawa*, Dec., Yangon, pp. 90 – 95.
- Ma Ma Lay, Journalgyaw, 1945, *Aphyu*, Journalgyaw Press, Yangon.
- 1971, *Thuma*, 2nd ed., Anupyinnya Press, Yangon.
- Maha Hswe, 1943, *Nyandhama*, Taingpye Pyu Press, Yangon.
- 1943, *Kala Byaungbyan*, Ye Ye Tauk Press, Yangon.
- 1944a, *Nga Min Phyityin*, Khin Aye Kyi Press, Yangon.
- 1944b, *Kyaikta Ywe Yu*, Zwe Sapay Press, Yangon.
- 1945, *Sit Myebin hnit Chit Yezin*, Khit Thit Nyane Press, Yangon.
- Malihka, 1974, *Myanmar Sapay Abeidan*, Vol. 1 – 2, Thissa Sapay Press, Yangon.
- Maung, Maymyo, 1942, *Wa Taloung*, Kalaungbyan & Aung Press, Yangon.
- 1945, *Saye Hsaya*, 2nd ed., Kalaungbyan Press, Yangon.
- Min Swe, 1943, *Sit Pye Ma*, Aung Press, Yangon.
- 1944, *That Wun Thu*, Aung Press, Yangon.
- 1945, *Achit hnit Taingbye*, Aung Press, Yangon.
- 1946, *Thwayzo*, Kyeni Press, Yangon.
- 1952, *Thway*, 2nd ed., Sa Dhabin Press, Yangon.
- 1965, *Da*, 3rd ed., Mya Sapay Press, Yangon.
- 1997, *Nanyi*, 3rd ed., Shwe Pinku Sapay Press, Yangon.
- Min Yu Way, 1978, "She Hkit Magazine Sazaungmya hnit Yahku Hkit Magazine Sazaungmya", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol.1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 99 – 134.
- Myanmar Pye Saye Hsayamya Athin, 1942, *Saye Hsaya*, No.1, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 2, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 3, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 4, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 5, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 6, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 7, Thuriya Press, Yangon.
- 1943, *Saye Hsaya*, No. 8, Thuriya Press, Yangon.
- Myanmar Naingngan Saye Hsaya Athin 1943, *Saye Hsaya*, No. 9, Thuriya Press, Yangon.
- 1944, *Saye Hsaya*, No. 10, Thuriya Press, Yangon.
- 1944, *Saye Hsaya*, No. 11, Thuriya Press, Yangon.
- Ngwe U Daung, 1978, "Journal Magazine Hmattaingmya", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 77 – 98.
- Nu,U, 1983, *Yesetbabeke*, 3rd ed. Yangon.
- Nya Na, 1943, *Lu Ywa hnit Lu Ywa*, Myanmar Alin Press, Yangon.
- 1944, *Bama Thit*, Myanmar Alin Press, Yangon.
- Nyun Aung(Yesagy), 2000, "Amyodha Naingnganyedhama U Hla", *Hnit 90pyi Ludu U Hla*, Kyibwaye Press, Mandalay, pp. 243 – 276.
- Ohn Lwin, Bagyi, U, 1978, "Sanezin Bagyi Thayoukphaw", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 1, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 219 – 278.
- Phe Thein, Cartoon, U, 1978, "Sanezin Cartoon Thamaing", *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 2, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 437 – 489.
- Saw Oo, 1954, "Mr. Kitamura", *Shumawa*, Apr., Yangon, pp. 182 – 235.

- 1962, *Ta Moe Thaukthaw*, 2nd ed., Bagan Saouk Press, Yangon.
- Shwe A, 1943, *Hkit Thit Yangon Hsoda*, Myanmar Youkshin Press, Yangon.
- 1944, *Sitpye Hsoda*, Maung Myanmar Press, Yangon.
- Shwe Hmya, Dagon, 1972, *Myanmar Naingngan Sapayhsumya*, Sapay Beikman Press, Yangon.
- Shwe Pein Thuang, 1943, *Bo Asia*, Myanmar Alin Press, Yangon.
- Taik Soe, 1966, “Hpehsit Hmattan”, *Myanmarza Meikpue*, Vol. 2, Bagan Saouk Press, Yangon, pp. 249–256.
- Than Nwe, Pyi, 1985, *Sit atwin hnit Sit Pyiza Pyazatmya*, Sapay Beikman Press, Yangon.
- Than Nyunt, Myanmar Alin, 2004, “Dhadinza Hsaya Editor Aung Htu Saye Hsaya Aung Htu Dhadinza Letpwe Laik Yaungda Aung Htu”, *Readers Journal*, Vol. 5, No. 28, Dec. 24, Yangon,
- Thu Hka, 1945, *Gonye Matulola*, revised ed. Chanda Press. Yangon.
- 1946, *Chit tau Chitte*, Shumawa Press. Yangon.
- Tin Aung, Bamaw, 1963, *Yoma Taikpue*, Than Sapay Press, Yangon.
- Tin Win, U, 1978, “Acha Taingyindha Badha hnit Badhagya Sanezinmya” *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 2, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 491–521.
- Win Mwun, Tekkadho, 1981, “Myanmar Wuthtushe Thamaing”, *Wuthtushe Sadan*, Vol. 2, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 239–pp.300.
- Yan Aung, 1942–44, *Gon Nge Thu & Chit Doukkha*, Kyaw Zaw Press, Yangon.
- 1967, *Hnit Layze Sapay Hkayi*, Nantha Press, Yangon.
- Zaw Gyi, 1970, “Aunglandaw” *Maha Hsangingyindhu Pyazat hnit Acha Takhanyat Pyazatmya*, Bagan Press, Yangon. pp. 283–314.
- Zawana, 1942a, *Ulay Pyawme*, Jarnalgyaw Press, Yangon.
- 1942b, *Thu Maya*, Ye Ye Tauk Press, Yangon.
- 1978, “Sanezin hnit Naingnganye”, *Sanezin Thamaing Sadanmya*, Vol. 2, Sapay Beikman Press, Yangon, pp. 523–573.

(英語)

- Minamida, Midori, 1987, “Anti-Fascist Writings of Thein Pe Myint”, *BURMA AND JAPAN*, Burma Research Group, Tokyo, pp. 85–101.
- 2007, “Burmese Literature Written in the Dark”, Kei Nemoto, *Reconsidering the Japanese Military Occupation in Burma(1942–45)*, Research Institute for Languages of Asia and Africa Tokyo University of Foreign Studies, Tokyo, pp. 113–139.
- Minn Latt, 1962, “A Dawn that Went Astray”, *New Orient*, III–6, Praha, pp. 172–176.

(日本語)

- 太田常蔵, 1967, 『ビルマにおける日本軍政史の研究』, 吉川弘文館, 東京.
- クリスチャン, ジョン, ルロイ, 日本外政協会太平洋問題調査部訳, 1943, 『現代ビルマの全貌』, 同盟通信社, 東京.
- 高見順, 1965, 『高見順日記』上巻, 勁草書房, 東京.
- テインペーミン, 1988~89, 『東より日出ずるが如く』南田みどり訳, 上中下巻, 井村文化事業社, 東京.
- ママレー, ジャーネージョー, 1978, 『血の絆』, 原田正春訳, 毎日新聞社, 東京.
- 南田みどり, 1982, 「戯曲, テインペーミン「新しい時代は明ける」をめぐる」, 『現代アジア社会の研究』, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪, pp. 205–236.
- 1986, 「二つの大戦前夜——「東より日出ずるが如く」への「パリ陥落」の影響について」, 『第二次世界大戦とアジア社会の変容』, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪, pp. 45–61.

- 1991a, 「テインペーミン著『ビルマで何が起こったか』をめぐって」, 『大阪外国語大学アジア学論叢』 Vol. 1, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪, pp. 91-131.
- 1991b, 「暗黒時代の果実—ビルマ反ファシズム小説のゆくえ」『世界文学』, No.72, 世界文学会, 東京, pp. 49-56.
- 1994, 「事実が虚構をしのぐ時代の文学—テインペーミンの抗日時代」, 『大阪外国語大学アジア学論叢』, Vol. 4, 大阪外国語大学アジア研究会, 大阪, pp. 107-163.
- 2000, 「1938~41年のテインペーミン —闇と光のはざままで—」, 『アジア太平洋論叢』, 第10号, アジア太平洋研究会, 大阪, pp. 19-57.
- 2001, 「ビルマの文学」, 川口健一・宇都清二編『東南アジア文学への招待』, 段々社, 東京, pp. 79-126.
- 2003a, 「2002年ビルマ—ヤンゴン大学周辺—」, 『世界文学』97, 世界文学会, 東京, pp. 67-73.
- 2003b, 「『日本時代』のビルマ小説—『刀』をめぐって—」, 『世界文学』98, 世界文学会, 東京, pp. 24-33.
- 2004, 「2003年ビルマ断章—過去と現在のはざままで—」, 『世界文学』99, 世界文学会, 東京, pp.102-107.
- 2006, 「虚構を凌ぐ現実の中で—2005年ビルマ—」, 『世界文学』103, 世界文学会, 東京, 136-141.
- 2009, 「誰が検閲者だったのか? —日本占領期のビルマ文学は語る」, 『日本翻訳家協会』No.188, 日本翻訳家協会, 東京, pp. 2.

本稿は2004年10月東京外国語大学における国際シンポジウム「ビルマにおける「日本占領期」における総合的歴史的研究」において行った口頭報告 How Burmese Fiction told 'Japan Hkit' をもとに執筆した Burmese Literature Written in the Dark [Minamida. 2007] に、平成21年度日本学術振興会・科学研究補助金、基盤研究(C)「ビルマ文学史における日本占領期」の研究成果を取り入れて加筆修正したものである。執筆にあたりさまざまな協力を仰いだビルマ国内の文学関係者に心から感謝を捧げる。

(2009. 12. 16 受理)